

ヨハネ福音書を読むために

川田 殖

〈1〉

旧約聖書ができ上るには 1000 年以上かかっているが、新約聖書はイエスの死後 100 年足らずのうちに書かれている。その過程を背景とともに表化してみよう。(固有名詞は聖書地図と聖書(小)辞典を参照)

【在位前 37-4 ヘロデ大王(以後ヘロデ一家)】

【在位前 31-後 14 初代ローマ皇帝アウグストゥス、 14-37 第2代ティベリウス「ローマの平和」】

【在位前 4-後 39 ヘロデ・アンティパス(狐)】

【在位 37-44 ヘロデ・アグリッパⅠ、 在位 50-93 ヘロデ・アグリッパⅡ】

30 頃 イエスの死。聖霊降臨。エルサレムに原始教会成立(ペテロ、ヤコブ、ヨハネなど)

32 ステパノ殉教。(フェニキア・キプロス・アンティオキア・ダマスコなどに教会成立)

33 パウロ回心

47-8 パウロ第1回伝道旅行(バルナバを助けてマルコと共に)小アジア・ガラテア地方を伝道

49-52 パウロ第2回伝道旅行(同行者テモテ、テトス)小アジアを経てマケドニア、ギリシア、ことにコリントには1年半滞在。

53-56 パウロ第3回伝道旅行 小アジア、ことにエペソには2年半滞在。

パウロ書簡『第1テサロニケ』『ガラテア』『コリントⅠ・Ⅱ』『ローマ』『ピリピ』『ピレモン』『コロサイ』『エペソ』

パウロ、エルサレムで捕えられカイザリアに2年幽閉、ローマに送られる。

【ローマ皇帝ネロ(54-68の在位中、最初の数年は最善の政治といわれた)】

ローマの大火、キリスト教徒迫害、61/2 パウロの処刑、64 頃ペトロの殉教

65 頃 『マルコ福音書』(著者ヨハネ・マルコ)

66-70 第1次ユダヤ戦争(熱心党などによるローマ政策への抗争、エルサレムは陥落。神殿消失、ユダヤ人はエルサレムから追放された。ユダヤ教団は以後ヨッパの南 20 km のヤムニヤに移り、律法の研究と実践をつづけ、やがて旧約聖書を正典化。そのためにファリサイ派はラビとして貢献、いわゆるラビ・ユダヤ教の中心となった。原始教会は使徒言行録 15 章の会議(48 年)以後、主イエスの弟ヤコブが中心となり、ユダヤ戦争時にはエルサレムから離れてヨルダン河畔に移り、のちの消息は不明。(ペテロたちは伝道に出発した。ペテロは小アジアを経てローマにまで至り、そこで殉教。)ファリサイ派はキリスト教にも硬化した。

80 頃 『マタイ福音書』キリスト教伝道は世界に開け、この頃『ルカ福音書』つづいて『使徒言行録』がルカによって著された。

85 頃 『ヘブル書』『エペソ』『ペテロⅠ』

【皇帝崇拝・皇帝ドミティアヌス(在位 87-96)のキリスト教迫害】

90 『ヨハネ黙示録』

95 『ヨハネ福音書』

100 『ヨハネ書簡』

100 頃 『エペソ書』

120 頃 『テモテⅠ・Ⅱ』『テトス』

150 頃 『ペトロⅡ』

これで見るとパウロの手紙の書かれた 53-56 から 100 年以内に新約聖書の全部が書かれたことがわかる。しかもその時代は「ローマの平和」という呼び名とは裏腹に問題多く、キリスト教としても多事多難な時代であった。しかしそれにもかかわらず一むしろそれゆえにと言おうか—福音のいのちはこれによって新しいいのちに生かされた人々によって伝えられ、100 年足らずして当時の地中海世界にあまねく知られることになった。新約の福音書はこのことを証言しているといえる。

それ以後のイエスの十字架の死と復活のうちに示された神の愛の力に満ちた罪のゆるしという心霊上の出来ごとが人間を変え新しい共同体(エクレシア)を作り上げる力になったことは一すでにパウロ自身が示したように (Ⅰコリント 15:1-15) —ペテロ、ヤコブ、ヨハネを中心とする原始教会の信仰把握にあり、その内容が使徒言行録第 2 章に示されるペテロの説教にあらわれていることは言うまでもない。

それが以後の新約聖書の文書全体の基調音になっていることを忘れてはならない。爆烈的ともいうべきキリスト教の伝道の中心にはこの様な確固とした信仰内容が含まれ、それは多くの時代的変遷を経てキリスト教の信仰告白の中心となっている。それに生きた力を与えるものがほかならぬ神の心と力(聖霊)であることも改めて心に刻むべきである。

〈2〉

使徒言行録の前半は原始教会、後半はパウロの活動に終わり、それ以後の歴史は、使徒教父、さらには教父によらなければならない。その伝承をまとめたエウセビオス『古代教会史』はきわめて大切である(これは今日邦訳がある)。これらをつなげてひとつのストーリーをつくってみよう。その前にひとこと。

パウロの活動のほかにもペテロその他の弟子たちの伝道活動は続いていた。こうして異邦人伝道はますます盛んになり、小アジアは勿論、パウロが行かなかったエジプト方面にも福音が広まり、すでに多数のユダヤ人が住んでいたアレクサンドリアなどはローマに匹敵する重要な意義をもつものとなった。これらの地域に残された新約聖書写本がこんにちのテキスト研究上重要なものになっていることもよく知られている。すでにパウロの時代にも、アレクサンドリア生まれでキリスト教に触れ、伝道者となったアポロがエペソに来て、パウロの同労者アクラとプリスキラから福音をさらに明確にされたこと、そのアポロがコリントに行き大いに受け入れられたこともよく知られている(使 18:24-28 Ⅰコリント 3:3-9)。

このエペソは、当時は小アジアにおける経済と宗教の両面でギリシアのコリントに勝るとも劣らない重要な町で、ヘレニズム時代にギリシア風の都市になっていた。思想的にはすでに前 5 世紀、この町出身のヘラクレイトスという哲学者が、万物の根源を火とし、後世に万物流転と称せられた永遠の火の生成消滅のうちに世界はあるとしつつ、その根底に不変の秩序(ロゴス)を見出そうとしたことで有名である。以後消長を繰り返しつつ依然として小アジ

アの中心都市であったが、私たちの関心としては、使徒ヨハネ、パウロ、テモテなどの活動のほか、イエスの母マリアがここで死に、葬られたという伝説などをみてもエペソの教会は小アジア教会の中心になっていたことが想起される。

ちなみにこの伝説はヨハネ福音書 19:25-27 で、イエスが十字架のそばにいる母マリアと、そのそばにいる「愛する弟子」を見て、彼にその母を託したことを想起させる。伝説ではこの弟子が使徒ヨハネと結びつけられているが、使徒ヨハネはイエスの十字架のそばにいたとは考えられず、またこの「愛する弟子」はむしろマルコ福音書の著者ヨハネ・マルコという説もあるが、これも考えにくい。しかしこの「愛する弟子」がイエスの母をともなつてエペソにいたこと、また使徒ヨハネがエペソに行ったことはあり得ることであり、両者からイエスのことをエペソ教会の人々が聞いたことも十分あり得ることである。エウセビオスによれば、使徒ヨハネはエペソに住んでいたが、迫害を受けて近くのパトモス島に流され、ドミティアヌス帝の死後エペソに帰り、トラヤヌス帝（在位 98-117）の時まで生きて、そこで死んだとされ、黙示録のヨハネがこのヨハネと同一視されている。2 世紀後半の教父、イエレナイオス（イレネウス）の『異端反駁論』の中で「主の愛する弟子」ヨハネがエペソ滞在中に、ヨハネ福音書を書いたとしているが、さらに古いパピアスの『主のことばの注釈書』では、イエスの弟子の中には使徒ヨハネのほかに長老ヨハネ（時には神学者ヨハネとも）がいたと記されている。思うにエペソ教会にはこの長老ヨハネに匹敵する人もいたであろう。この長老ヨハネ（のごとき人）が使徒ヨハネにさかのぼる伝承を土台として、それを象徴的に表現するとともに、その意義を論述の形でつけ加えながら展開したものが、ヨハネ福音書の原形になったものではあるまいか。以上は上述の古伝承からする想像であるが、その当否はヨハネ福音書本文から判定すべきであろう。現代的想像や古伝承のくいちがいから全部を疑い、「要するに不明」と片付けるだけではあまりに無責任で、建設的想像も必要ではないか。こうしたことを各自自分で考えつつ他と意見交換して、訂正充実させるようにしたい。

成立時期については最も年代の古いパピルス（150 以前のもの、エジプトで発見されたエジプトン・パピルス）にヨハネ福音書 5 章と 10 章の章句を思わせるところがある。すでにエジプトでも 150 以前に知られていた（これが下限）。上限（いつ書かれたか）は確定できないが、ユダヤ戦争（66-70）以後、パリサイ派（ヨハネ福音書では「ユダヤ人」）が硬化して、キリストを信ずるものを会堂（シナゴグ）から追放するなど、迫害が厳しくなってくる頃を（本文に照らして）考えれば、95 年ごろと見るのが自然か。訂正加筆と思われるものも少なくなく、まだ未定稿の部分もあったことは本文を読んでいる中で感じられることである。

〈3〉

以上のような背景成立事情を持つヨハネ福音書は内容的にも顕著な特色を持つ。まず第 1 章冒頭（1-18 節）のプロローグは、ヨハネ福音書全体の序論であるとともに結論だともいえる。ここ以下の本文を読む時にもこのことを忘れてはならない。

ヨハネ福音書は他の福音書にも見られる洗礼者ヨハネの役割について、独特の述べ方をした上で、2 章から 12 章まではイエスの伝道活動に当たる部分を「しるし」（セーメイオン）として述べる。

その第 1（2:1-4-42）は、カナの婚宴、過越祭での宮潔め、人の心を知るイエス、ニコデモ

との対話、ヨハネとイエス（以上「イエスは自分の民のところに来た」）

第2（4：46-5：47）は、イエスとサマリヤの女（「生ける水」）、ベテスダの池のほとりの癒し、み子の権威（イエスと神との関係）、その証

第3（6章）は、5千人へのパン（「いのちのパン」）、湖上歩行（その意味）、ユダヤ人たちのつぶやき、弟子たちの離散、ペテロの告白（「永遠のいのちのことば」）

第4（7-8章）は、信と不信の間（叙述の順序混乱）、イエスの兄弟たちの不信仰、仮庵祭でのイエス、「この人はメシアか」、生きた水の流れ、「わたしは世の光」、「真理は汝らを自由にする」、ユダヤ人たちの不信、下役たちイエスの逮捕に、[「姦淫の女」は挿入]。イエスの反論（18：37-58）、[10：22-39（ユダヤ人イエスを逮捕）をここに入れる]

第5（9章-10章）は、光によるさばき、生まれつきの盲人の癒し、パリサイ人の罪、羊の囲みのたとえ、「わたしは良い羊飼ひ」（ユダヤ人はイエスを拒絶する）

第6（11章）は、ラザロの死と復活、「私は復活であり命である」、イエス殺害の計画

第7（12章）は、死を通しての生命、ベタニアのマリア香油を注ぐ、ラザロに対する陰謀、ギリシア人の来訪、「一粒の麦もし死なずば」、イエスを信じない者たち、イエスのことばによるさばき（救いとさばきの現在性）

以上、ヨハネ福音書の前半「しるし編」は全体として

1、奇跡物語やたとえ話、さらに（説）教の記録が中心だった共観福音書のイエスの活動がここでは象徴的物語（「しるし」）となり、それに講解的説教や会話が続けている。

2、単なるエピソードの羅列ではなく、父なる神と子なるイエスの関係を土台とした救いとさばき、十字架と復活のテーマが陰に陽に繰り返され螺旋的に上昇、展開、深化して進んで行く（「フーガ」的技法）。

3、「自分の民のところに来た」イエスの伝道は少数の例外を除いては受け入れられず、反対者の劇化、民衆の離反、弟子たちの無理解のうちにイエスの身の危険が増大して行く。

4、これとは逆に父なる神のみ心に従い、世に遣わされ、使命を果たしてやがて父のもとに帰り行く者としてのイエスの苦難と愛の姿がますます明瞭となり、受難物語編につながって行く。（プロローグ1：12）。

後半 受難物語編（その前半はことにヨハネ的）

1、（13章）最後の晩餐、洗足、愛のすすめ（ヨハネ福音書の特ダネ記事）

2、（14-16章）訣別遺訓

14章「汝ら心を騒がすな」、イエスは父に至る道、聖霊の約束

15章「私はまことのぶどうの木」、わが愛におれ、互いに相い愛せよ、「友」と呼ぶ、迫害の予告

16章 聖霊の働き

3、（17章）大祭司の祈り（残される者、さらに加わる者、エクレシアのために）

4、（18-19章）捕縛、断罪、十字架、埋葬（ほぼ共観福音書に近い）。

5、（20-21章）復活物語

20章 マリアへの顕現、弟子たちへの顕現

21 章 ガリラヤでの顕現、イエスとペテロとの対話

以上のような構成をもつヨハネ福音書を共観福音書とあわせ読むと一層得るところが多いだろう。

〈4〉

はじめに記したように、キリスト教はただならぬ時の流れの中で一しかしよく見れば私たちの時代と共通するところの多い世界の中で一わずか1世紀足らずのうちに当時の地中海世界の全面に広がって行った。新約聖書はその証言であるが、そこにはパウロとその同労者や後継者らの大きな働きが記されていると共に、ペトロやヨハネら原始教会の創立者たちの働きにも注目を怠ってはならない。福音はまたローマに伝えられただけでなく、聖霊降臨の記事（使徒言行録2章）をみてもわかるように、当時の全世界に散在した会堂（シナゴグ）で学び祈っていたいわゆるディアスポラのユダヤ人及びその同調者にもあまねく伝わって行ったのである。その重要な舞台はヨーロッパ以外にエジプト、小アジア、シリアに至り、ここにはすでにペルシアやギリシアの文化の影響を受けた東西混合のヘレニズム文化が支配していた。学者はそこにすでに当時の宗教思想が広まっていた顕著な例として、ヘルメス文書、アレクサンドリアのフィロン、初期のグノーシス、ナグ・ハマディ文書、タルムードに至るラビのユダヤ教文書、死海文書、マンダ教などを紹介している。さらに広くはこれを受け入れる通俗の宗教行事や会堂があったことはすでに使徒言行録の8章-12章13章、ことにエペソでの18-19章などからも推せられる。他面17章のアテネのような所もあった。

このようなことはすでにパウロの時にも言われているが、前述の教父たちの時代にも引き続き同様であったろう。新約時代の後半、つまり85年頃以後に書かれたものにはこのような背景があり、ヨハネ福音書もその典型的なものである。にもかかわらず見落としてならないのは、先にも述べたようにこれらの中にあっても、前述原始教会以来の信仰告白の本筋はいささかも変えられず、それが象徴的な形でふまえられていることである。

長々と記してきたが、ヨハネ福音書を読むには、(1)以上のことを頭に入れて、(2)まず全体を繰り返し熟読し、違った邦訳と比べながら疑問点をマークすること。(3)その際、他の福音書には珍しい用語、例えば「ことば」「いのち」「光」「世」「栄光」「恵み」「真理」「神の子」「人の子」「ひとり子」、何よりも「神」（ほとんどすべてに冠詞がついている）、その他「見る」「聞く」「知る」「信ずる」などヨハネ福音書における独特の意味を辞典で確認すること。それらをイエス・キリストとの出会いと交わりの中でつかむことが大切である。(4)さらにイエスの自己証言「私が何何である」、相互内在関係（「何何のうちにある」）といった出会いと交わりの内在を示す（参考 ガラテア2:19・20）ヨハネ福音書独特の言いまわしやイエスの権威の根拠（ことに5:19-30）、派遣の自覚などに注目することが大切である。

先にも内容についてみたように、ヨハネ福音書は雑然とした説教集ではなく、考え抜かれた文書である。具体的に物語の象徴的意味を語りながらすでにプロローグに明示された中心的なメッセージを繰り返し展開、深化して行く。(5)だから、ある所を読む時にも全体の中でその位置づけを理解するとともに、たえず先に述べられたことにも振り返って、その意味の深まりをわがものとするのが大切である。

例えば「霊」ということばについても第3章ニコデモとの対話で、イエスはすでに「だれでも水と霊とによって（新たに）生れなければ神の国に入ることはできない」と語り、「神はそのひとり子を給うほどに世を愛したもうた。それは彼を信ずるものがひとりも滅びないで永遠のいのちを得るためである」というテーマが（説教の形で）提示されている。これが訣別説教（エクレシアへのことば）の聖霊論にまで繰り返し語られている。この中で「霊」「聖霊」「弁護者」「助け主」としての神の心と力がこれを受け入れる者、信ずる者に与えられる。こうして神の愛が新しく生きる力の根源となる。神と共に生きる「永遠のいのち」が体験される。このような形でヨハネ福音書のメッセージをわがものとするのが求められる。（6）この中でプロローグをあらためて味わうならば、ヨハネ福音書の心に触れるだろう。（「父のふところにいますひとり子なる神（1：18）」）。

以上のことを完全に行うことは容易ではないが、目標は遠くとも、これらを念頭に置いておのがじし、しかも「共に」この消息に生かされたい。それは今日の世界に生きる私たちの自覚と工夫をうながすものになるだろう。ヨハネ福音書には他の新約文書のような旧約からの引用は少なく、また「信仰」という名詞も「教会」（エクレシア）ということばもない。しかし教会が生まれて半世紀以上経っている読者がこれを読むならば、その訣別遺訓はエクレシアへのことばであり、私たちに直接語りかけるメッセージであることがわかる。私たちもヨハネ福音書17章に示されたイエスの祈りのうちに置かれているのである。

ヨハネ福音書を読むにあたって考えるべきことはまだまだほかにたくさんある。しかしそれはヨハネ福音書を読みながら気付くことでもある。とりあえず上に記したようなことから始めて、その過程を経てそのあとで自ら考え調べて行くことが大切である。

例えば、ヨハネ福音書は上記のような事情の中で書かれたとしても、それがこんにちの私たちの事情とどのような異同があるか。したがって、こんにちの私たちがこの日本、この世界で福音を説くには、生きるには、どのような形でなさるべきか、どのような状況で何を語るべきか、何を生きるべきかを問われるであろう。「神」などという言葉が迂闊に出すことのできないこんにちの社会で「神なしに」生き「神」の实在と働き（栄光）を証しするとはどういうことか、どうすることかを考えることが必要であろう。この中で気付かされることのひとつは「愛（アガペ）」であろう。その愛がヨハネ3：16-17につながるためには「神の心と力」（聖霊）を祈り求めることが第一であろう。この点でも、このヨハネ福音書は私たちに大切なことを与えてくれるはずである。そのために、佐久学舎で共に生き共に学び共に祈る共同生活が与えられれば幸いである。（2025年5月30日）